

太田 登

『啄木 我を愛する歌—発想と表現—』(八木書店、2022年)

天理大学名誉教授

澤井 義次 Yoshitsugu Sawai

本書『啄木 我を愛する歌—発想と表現—』の著者は、天理大学文学部国文学国語学科において、長年にわたり教育研究に尽力された太田登・天理大学名誉教授である。日本近代文学研究者の太田氏は、石川啄木の研究や与謝野寛・晶子の研究の第一人者として活躍され、国際啄木学会・元会長としても、国内外で広く知られている。

本書の刊行によって、太田氏の近代短歌研究4部作が出版された。3冊の既刊著書は『啄木短歌論考 抒情の軌跡』(1991年、八木書店)、『日本近代短歌史の構築』(2006年、八木書店)、『与謝野寛晶子論考—寛の才気・晶子の天分—』(2013年、八木書店)である。本書は、著者が長年、蓄積してきた研究成果をふまえ、石川啄木の第一歌集『一握の砂』(明治43年)の第一章「我を愛する歌」151首を評釈したものである。

ここで紹介する本書『啄木 我を愛する歌—発想と表現—』の構成は、次のとおりである。ちなみに、巻末に付記されている啄木短歌索引、詩歌作家別索引、および人名事項等索引は、本書の内容を読み深めるうえで有意義である。

短歌史を創る『一握の砂』の意義

「我を愛する歌」評釈

主要参考文献

あとがき

啄木短歌索引

詩歌作家別索引

人名事項等索引

著者は冒頭の論考「短歌史を創る『一握の砂』の意義」において、歌壇や歌人の動向を基軸とした既成の短歌史を見なおし、「あらたな短歌史を創るという自覚的な方法」をめざす視点から、歌集『一握の砂』の短歌史的意義を論じている。

『一握の砂』が刊行された明治43年(1910)は、著者によれば、近代短歌史の大きな転換点にあった。当時、自然主義の思潮のために、短歌形式はもはや「自己表現という近代文学の要求に応えられない」との短歌滅亡論が、歌壇に大きな影響を与えていた。歌人たちは短歌の存亡を危機的に受けとめ、歌集という文学作品によって、短歌が近代文学として存続することを立証しようとした。そうした背景のもと、明治43年に優れた名歌集が刊行され、近代歌集史の第二黄金期を迎えた。

そうしたなかであって、ひときわ精彩を放ったのが啄木の『一握の砂』であった。『一握の砂』という歌集は、著者によれば、「滅亡論の危機を克服することで可能であった近代短歌の成立にもっとも大きく貢献した」という。つまり、『一握の砂』における創作行為は、著者の言葉を援用すれば、「自然主義的思潮に誘発された短歌滅亡論にたいする果敢な挑戦」でもあったのだ。

『一握の砂』という歌集の表現方法は、著者によれば、「われ」の深層意識を客観的に解析するもので、それは昭和初期のモダニズム短歌の表現に摂取された。その意味では、この歌集は現代短歌の起点そのものと密接に関わっている。

さらに『一握の砂』の物語的世界は、啄木が短歌表現の基底



を形成する「私性」という問題を深く認識していたからこそ可能であった、と著者は言う。著者は「我を愛する歌」の151首それぞれについて、歌意、制作、初出、重出、主題、評釈、補説、あるいは補注の項目に沿って、歌の発想と表現のありようを見事に分析している。特に評釈では、啄木の短歌に関する先学の研究を再検討しながら、著者の〈読み〉

を展開する。

この歌集『一握の砂』の第一章「我を愛する歌」の巻頭歌は、次の一首である。この歌は今もなお、「近代短歌の愛誦歌」として広く親しまれている。

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

この歌集の書き出しは、主人公が「泣きぬれて」登場する場面からはじまる。不器用で弱々しい蟹の姿に、著者によれば、「故郷さえ喪失した漂泊の悲しみが『泣きぬれて』浄化されている」。この歌は「そうした敗者の人生を生きる自己をいとおしむ自己愛惜の歌である」という。だからこそ、啄木はこの「東海の小島」の歌を「自己の代表作」とみなし、歌集の第一章「我を愛する歌」の冒頭に据えたと考えられる、と著者は論じる。

歌集の巻頭に自讃歌として据えられたこの歌の主題は、「われ泣きぬれて」という感傷性にある。著者が言うように、この感傷性こそが、いわば通奏低音のごとく、この歌集全体に響いている。さらに、著者が著書『啄木短歌論考 抒情の軌跡』でも明らかにしているように、この「東海の小島」の歌は、明治43年7月号の「創作」の〈自選歌〉23首の冒頭に据えられている。その時点で、「『戦ひを好む弱者』の心の微動を映し出すという『一握の砂』の原風景は啄木の脳裏に焼き付けられていた」と著者は言う。

啄木の短歌において、「うたことば」によって表出された「こころ」の微妙な動きを読みとるためには、「還元的な理解と想像的な理解とが相互に交流する重層的な視点」が求められる。著者は「ことば」の深層を読み解くことによって、「こころ」の地平を広げながら、「我を愛する歌」115首を一首ごとにテキストとしての主題性や表現性をふまえて評釈している。

啄木の短歌は「国語」の教科書に掲載されるなど、広く親しまれている。百年の歳月を超えて、今もなお、多くの人々に読み継がれている。啄木に精通している太田氏が纏めた本書を繙くとき、啄木短歌がもつ意味の深みをいっそう深く理解できるだろう。本書を読むことによって、読者は啄木短歌の言語哲学的パースペクティヴの深みへといざなわれていく。太田氏の文学テキスト論とも言うべき本書を読者諸氏に強く薦めたいと思う。